

高齢者にみられる精神的特徴に関する 臨床心理学的考察

臨床心理学研究センター 研修員 森 麻友子

要 約

我が国では、他国に例を見ない速さで高齢化が進んでいる。今日、高齢者は65歳以上と定義されているが、他の発達の段階以上に個人差が大きい故に、高齢者をどのように捉えるかに困難である。そこで本研究では、居住環境、加齢、性差から、自己概念と実存に関する価値観を中心に、SCT及びPGCモラル尺度を用いて面接法により高齢者の精神的特徴を検討し

た。結果、探索的に「意欲・継続型」「危機型」「人生幸福型」の3つを類型化した。更に、3類型の中から代表例を取り上げて事例検討を行い、本研究の補完的役割を期待した。

キーワード

高齢者、自己概念、適応、老年用SCT

I. 問題と目的

1-1. 高齢者の増加とその多様さ

高齢者とは、WHOで定義されているように、一般に65歳以上の人である。我が国では、他国に例を見ない速さで高齢化が進んでいる。厚生省（2000，注：現厚生労働省）によると、1950年の高齢化率（65歳以上人口が全人口に占める割合）が4.9%に対し、2000年では、17.2%（人口の6人に1人）であった。さらに、2015年には、25.2%（人口の4人に1人）、2050年には、32.3%と現在の約2倍に上昇することが予想されている。国際的に見ても、2025年までに我が国の高齢化率は、世界最高水準に達すると言われている。また、現在の平均寿命は、男性78.07歳、女性84.93歳であり、女性は世界トップに躍り出ている。以上のことから、まさに「高齢者の世紀」が始まるということができる。

65歳以上を高齢者と定義しても、今日では、例えば65歳で仕事をしている人、90歳を超えて寝たきりな人等、全て同じ「高齢者」となり、年代の幅が広すぎる。その背景を踏まえて、米国の社会老年学者Neugarten（1975）は、55歳から74歳までを「前期高齢者」、75歳以上を「後期高齢者」と区分した。今日では、近年の長寿化に伴い85歳以上をさらに「超高齢者」として区分している（古谷野，2002）。

しかしながら、暦年齢の細分化をしても、身体的側面、社会的側面、知的側面、価値的側面等からみても、他の発達の段階以上に個人差が大きく、どのように高齢者を捉えるかは一様ではない。

1-2. 生涯発達理論

Baltes（1987，東・柏木・高橋監訳，1993）によると、生涯発達心理学とは一生を通じて行動

の恒常性と変化を研究することであるが、発達過程は成長や進歩だけではなく、適応能力の獲得（成長）と喪失（衰退）との間に内在するダイナミックスを伴う。その道筋は、生活条件や経験により様々であり、歴史的文化的な条件とその変化により影響を受ける。このような生涯発達心理学的視点から老年期の理論を見ていくと、老年期とは、人間の一生を発達的に捉えた場合の最後の段階をいう。

Erikson, E. H. (1950, 仁科訳, 1977) は、人格発達理論を「人間の8つの発達段階」として展開し、これをライフサイクルと呼んだ。各段階に固有の心理・社会的危機があり、「老年期」は最後の第8段階で、発達課題の危機を「自我の統合 対 絶望」とであるとした。

「統合」とは、最も単純に言えば、「一貫性と全体性の感覚」(1982, 村瀬ら訳, 1989, p85)であり、「絶望」とは、連鎖の喪失による終局的状況下に耐えられず、死の恐怖が、無意識的であれつきまとう状態である。この危機を乗り越える経過の中で「英知」が育まれ、自分の人生に意義と価値を見出すことができ、死の訪れを受容する。「英知」とは、「死そのものに向き合う中での、生そのものに対する聡明かつ超然とした関心」(1982, 村瀬ら訳, 1989, p79)である。Erikson, E. H. は、人間が発達していく上で、特に文化的、歴史的の影響に光を当て、個人の環境への関与と社会との相互作用が重要であるとし、心理社会的発達を唱えた。

Peck (1968) は、さらに詳しく老年期の発達課題を①自我の分化 対 仕事—役割の没頭、②身体の超越 対 身体への没頭、③自我の没頭 対 自我の超越、とした。①は、職業や親役割を含めた引退の危機であり、これまで積み上げた成果を越えて、広い役割に満足し、別の面にも目を向け自分の価値観を創造していけるかが問題となる。②は、身体的健康の危機であり、悪化ばかりに捉われることなく、それを越える

ような対人関係や趣味、創造的な精神活動に満足することが、生きがいにつながり幸福感を生む。③は、死の危機であり、長くはない未来故に、自分の生死ばかりに注意が向くのか、これまで自分が生み出した子供や友情、文化を通して個の意識を超越し、これからも続くという恒久的な意味を見出すかが重要となる。

1-3. 適応に関する理論—活動理論と離脱理論

社会の中に改めて高齢者を位置付けてみると、老年期には仕事を中心とした社会生活や親役割が縮小されていく事実気づく。その役割という概念から高齢者の適応を検討した理論として「活動理論」と「離脱理論」がある。

活動理論とは、米国社会の老化に対する価値判断を表しているが、生物学上の変化等不可避免な場合を除き、高齢者は中年期と同じ心理的社会的欲求をもっている。従って、できるだけこれまでの活動性を維持し、生活圏の縮小に抵抗する者は、生活満足感が高く適応に成功するのである(柚井, 1975)。

Cumming & Henry (1961) によって提唱された離脱理論とは、個人と社会の様々な関係が離れていき、残る関係にも質的な変化がみられ、人間にとって避けることのできない過程であると定義した。離脱していくことは、自分の内なる世界に関心を向けるためにも望ましいことで、上手に年をとる(successful aging)ために必要な条件であるとした。

さらに Havighurst (1961) は、高齢期の発達課題は、身体の衰退、役割等の喪失や死別といった「喪失に伴う適応」とこれらの喪失感を理解し合えるような同世代の仲間の「親密な人間関係」とであるとした。前者には役割の柔軟性や代替が重要である。

1-4. 高齢者に関する臨床心理学研究

老年期の発達の課題の重要な問題として「死」

への態度が挙げられる。岡本（1990）は、60歳以上の70名の施設者を対象に、死の認知度を6分類し、精神的充足感、老年期以前の達成度、自我機能、との関連性について検討した。その結果、積極的受容型が最も多かった。また、自我同一性の達成度が高いと老年期の死の受容を助け、自我機能が高いと死に対して主体的に受容することが可能であることを示唆した。

適応に関して石原ら（1999）は、50～74歳の在宅者1,785人を対象にLawton（1975）が作成したPGCモラル尺度によって、主観的幸福感を測定し、5年間にわたりその経年変化を検討した。その結果、全ての年齢で経年変化はみられず、安定していることが分かった。

下仲ら（1981）は、60～86歳の24名を対象に、2年間で計4回の追跡調査を行い、施設生活の適応に、自己概念、自己評価を中心とした人格機能がどのように影響しているのかを検討した。その結果、自己概念では、入所前は肯定視にせよ否定視にせよ自己の概念化が明白に言語化されていたのが、入所後はそれらの傾向はやや少なくなり、代わって自己を明確化せず、曖昧にして答えるという傾向が示された。また、施設入居による心理的動揺がみられず、幸福感が入所前よりも良くなっていた。

河合ら（1990）は、老年期の夫婦の依存関係を検討した結果、退職後、社会的役割を喪失した夫は、生活が縮小し、家庭生活においては精神的にも身体的にも、より妻に対して依存的になる傾向が認められたと述べている。前田ら（1988）は、高齢者の適応感の研究で、特に男性の場合、配偶者との死別経験は適応感と関連があると指摘した。

精神機能に関しては、下仲（1988）が、文章完成法（以下SCTと記す）を用い、65歳以上の859名を対象に、自己概念を中心に家族関係、対人関係、実存に関する価値観が、在宅と施設の差異を調べている。その結果、在宅高齢

者は、人生を肯定的に捉え、身体的自己を健全とみなし、死や老化を認めているものの限りある未来を積極的に生きようとする意欲が見出された。一方、施設高齢者は、人生に否定的で、過去を客観視し、身体的自己を客観視するか否定的に思い、自己の可能性の追求に関しては非積極的だった。

以上の理論と諸結果を考慮にいれ、高齢者の体験世界を臨床心理学的に考察するために、以下のことに着目する。

自己は、自己の存在と意味の重要な要素をなす社会的、身体的、時間的秩序の中におかれており（Wells & Stryker, 1987：東ら監訳, 1993）、高齢者も例外ではないと考える。つまり、過去・現在・未来の時間的流れの中で生きている。また、文化により自己という概念が異なる（北山ら, 1995）という視点から、歴史的文化的背景を考慮にいれる。さらに、高齢者を65歳以上としてひとまとめにせず、特に加齢、性差、居住環境の影響を踏まえる。

1-5. 本研究の目的

高齢者は、これまでの人生をどのように捉え、調査時点での「今」何を思い、また、その次に訪れる不可避的な死を含めた未来をどのように感じているのだろうか。本研究では、上記の着目点を含め、高齢者の精神的特徴を社会的な関与も含めて臨床心理学的に考察する。

Ⅱ. 方 法

2-1. 調査対象

調査は、近畿圏の生涯教育センター、老人保健施設、特別養護老人ホーム、及び府県下から選ばれた、痴呆者を除く65歳以上の69名を対象とし、2002年7月から8月にかけて、筆者が個別に面接を行った。表2-1に年齢層の内訳を居住環境別・性別に記した。在宅では主に高齢前

表2-1 被験者の年齢層別人数構成（居住環境別、性別）

	66～74歳		75～84歳		85～99歳		全年齢	
	n	平均年齢（S.D.）	n	平均年齢（S.D.）	n	平均年齢（S.D.）	n	平均年齢（S.D.）
在宅	18人	70.0（2.24）	14人	78.4（2.84）	4人	87.3（3.30）	36人	75.3（6.34）
施設	4	71.5（3.26）	9	81.1（3.79）	20	89.0（3.73）	33	84.7（7.00）
女性	14	70.9（3.04）	15	80.1（3.03）	21	88.9（3.80）	50	81.2（8.19）
男性	8	69.8（2.43）	8	78.3（2.92）	3	87.3（2.52）	19	76.1（6.88）
総計	22	70.5（2.94）	23	79.5（2.97）	24	88.7（3.66）	69	79.8（8.13）

期・高齢後期、施設では主に高齢後期・超高齢期に偏った年齢構成となった。

2-2. 調査方法

（1）文章完成法（SCT）

高齢者の精神的特徴を評価する目的でSCTを実施した。項目は、時間軸における自己、生と死に関わる実存的価値観、および役割に着目して設定した（①現在・過去・未来の自己、②死に対する態度、③人生に対する態度、④役割、⑤生きること、⑥信仰、⑦今の願い、⑧時々思うこと）。①③⑤⑧は、下仲・村瀬（1975）が作成した自己概念を評価するSCT、②④は、岡本（1990）が高齢者の精神的充足感を評価するために作成したSCTを使用した。

（2）PGCモラル尺度

高齢者の適応を評価する客観的な指標としてPGCモラル尺度（全17項目、Lawton, 1975）を実施した。

2-3. 面接手続き

面接の目的、面接が途中で中止してよいこと、プライバシーは保護されることを説明し、PGCモラル尺度、SCTの順で口述筆記により実施した。面接所要時間は、個人差があったものの、およそ20分から50分であった。

Ⅲ. 結果と考察

3-1. SCTの結果と考察

まずSCT各項目回答を内容によって分類し、その後、下仲（1988）の作成した評価基準を参考に、各内容を肯定、否定、客観・中立に分類した。各項目の分類は2名の評価者（筆者及び臨床心理学を学ぶ大学院生）が実施し、判定者間の一致率は82%～100%の範囲であり平均は88%であった。回答例と分類・評価結果を表3-1にまとめた。

次に、精神的特徴が各要因（居住環境、加齢、性差）でどのように影響するかを検討し、表3-2にSCT評価結果を整理した。更に、評価のスコア化を行って平均値を算出し、図3-3～図3-8に要因毎に図示した。

（1）居住環境の影響

在宅高齢者は全体に中立的から肯定的であり、施設高齢者は一部の項目で否定的であり群間で異なった傾向であった。特に、①未来の自己と⑤役割については有意な違いが見られた。

①未来の自己では、在宅群で『意欲・奉仕』（10名）が最も多く、55%の人が肯定であるのに対し、施設群は『死』（8名）が最も多く、59%が否定であった。⑤役割では、在宅群で肯定が72%を占め、実際に「役割がある」（12名）、周囲との『人間関係』を保つ（8名）、家族を『見守る』（5名）等が挙げられたが、施設群では、自分の役割として『過去の事実』を客観的に回答した人が顕著に多かった（72%、23名）。

表3-1 SCT分類・評価と回答例

①過去・現在・未来の自己							
これまででは	分類	n (%)	評定	例			
	受容・満足	23 (33)	肯定	身体が弱かったですが、みんなの愛情で豊かに生活ができた おじいさんもやさしかったし何もなくて幸せな方です			
	幸福	9 (13)					
	否定・拒否	14 (20)	否定	主人が死ぬまではつらい思いをしてきました。今まではよくなかった そんな悪いこともなくすんなり来た いろんなことは考えないようにしている 思い出すのは戦争のことばかりです まあまあでした			
	自然に	5 (7)					
	何もない	10 (14)					
	過去の事実	6 (9)					
	普通	2 (3)	中立				
	その他	4 (6)					
	今の私は	受容・満足	20 (29)	肯定	現状に非常に満足している とにかくしたいことがたくさんある、いろんなものに挑戦したい 気楽に誰にも指図されずに自分の考えで生きていけるので幸せです		
		意欲	7 (10)				
		幸福	19 (28)				
		死	4 (6)	否定	もういつでも死ぬかと思っている 分かりません。幸せでない		
		否定	9 (13)				
		普通	6 (9)	中立	中間だな、つらいことも気楽なことでも楽しいこともなく普通		
その他		4 (6)					
これから	意欲・奉仕	15 (22)	肯定	人様のために自分の力でできることなら何なりとやってあげたい 体に気をつけて元気に暮らさせていただく みんな仲良く元気に生きられたらいいのになと思います			
	健康	6 (9)					
	人間関係	6 (9)					
	死	11 (16)	否定	死ぬことしかない もうここに来て何もかも考えることない様に思います 考えても仕方がない。できることもできないのだから			
	何もない	7 (10)					
	否定・拒否	5 (7)					
	継続	8 (12)	中立	この調子ですつといてくれたら結構です 自然にお任せします			
	自然に	7 (10)					
	その他	4 (6)					
②死に対する態度、③人生、④生きること	死に対して、私は	積極的受容	20 (29)	肯定	主人に先立たれてから全く死に対して何の恐れもなく平穏な日々 死にたくないとかはない、自然にお任せ		
		受動的受容	20 (29)				
		否定的受容	6 (9)	否定	待ってる、これ以上生きないでもよい、寂しいし行くところもない そういうことは考えない、考えないようにしている もうなあ、恐いです、一人でいくの寂しい		
		否認	11 (16)				
		恐怖	4 (6)				
		死の願望	8 (12)	中立	うちの母は楽に亡くなったから、自分もそんな風に まあいろんなことがあって苦勞もしたけど自分の運命やなあと思う 常に前進すな 幸せでした		
		その他	1 (1)				
	私の人生は	受容・感謝	16 (23)	肯定	母と別れるときにつらかったし、父が病気になるにつらかった どうでもなれという気持ち、ダメになるから考えないようにする 戦争中に父が死に、戦後兄が病気になるまで昔の方がいろいろあった まあまあ平凡ですわな		
		意欲	5 (7)				
		幸福	18 (26)				
		否定	11 (16)	否定			
		拒否	2 (3)				
		過去の事実	8 (12)	中立			
		普通	8 (12)				
		その他	1 (1)				
生きると いうことは	受容・感謝	13 (19)	肯定	すばらしい、苦しい事も含めて 一生勉強だと思います、年をとっても進歩していくもの			
	意欲	5 (7)					
	難しい	18 (26)	否定	難しいと思います 自由にならん、若い時から勉強できる環境がなかったり 自分の考えを大きく持って、体のことや嫌なことを忘れる 自然任せ、考えたってどうなるものでもなく			
	否定	14 (20)					
	知恵	15 (22)	中立				
	自然に	4 (6)					
⑤役割	私の役割は	役割がある	12 (17)	肯定	会社を健全にすること、家族を幸せにすること もう会社を辞めたいし、後は孫たちを見守ってゆくくらい お嫁さんと子供たちとお話できること 子供たちに迷惑をかけないこと		
		見守る	6 (9)				
		人間関係	8 (12)				
		邪魔しない	3 (4)				
		役割がない	14 (20)	否定	何もすることないからない、その日が済めばよい 女としての役割、終始子供を育てて母親だった		
		過去の事実	25 (36)				
		その他	1 (1)				
⑥信仰	私にとって 宗教とは	興味がない	30 (43)		あんまり興味ない、あってもいいと思うけど信じすぎたらあかん 自分の中では大きい存在、しんどいときに頼ります 先祖の霊に感謝するのみの日々です		
		信仰がある	22 (32)				
		先祖	17 (25)				
⑦今の願い	今の私の 願いは	特にない	16 (23)		何も思うことはない、思っても仕方ない 苦しまずに死にたい 家族みんな元気で違者でいてほしい 夫婦の健康		
		死	15 (22)				
		家族	15 (22)				
		健康	15 (22)				
		その他	8 (12)				
⑧時々思うこと	時々、私は	何もない	22 (32)		時々考えることなんて何にもないです 子供のこと、どうしているか、親だから考える あんまり長わづろいせんとお迎えが欲しい いろんなことを知ってやっていこうという意欲はある 泣いているだけ		
		家族・夫	11 (16)				
		死	9 (13)				
		意欲	6 (9)				
		否定	6 (9)				
		その他	15 (22)				
		合計	69 (100)				

表3-2 SCT評定結果（居住環境、加齢、性差の影響）

		総計	過去の自己			現在の自己 ^{#1}			未来の自己 ^{#1}			死に対する態度			人生			生きること			役割 ^{#1}		
			肯定	中立	否定	肯定	中立	否定	肯定	中立	否定	肯定	中立	否定	肯定	中立	否定	肯定	中立	否定	肯定	中立	否定
居住環境	在宅	36	20	8	8	25	2	6	18	11	4	25	4	7	25	6	5	13	8	15	26	2	8
	施設	33	12	15	6	21	4	7	9	4	19	15	4	14	14	11	8	5	11	17	3	23	6
	df=2		$\chi^2=4.29$			$\chi^2=1.08$			$\chi^2=16.0***$			$\chi^2=4.71$			$\chi^2=5.14$			$\chi^2=4.03$			$\chi^2=36.1***$		
年齢	高齢前期	22	10	8	4	15	1	5	11	3	6	16	2	4	15	5	2	7	8	7	14	3	4
	高齢後期	23	13	4	6	17	1	2	9	7	6	11	3	9	12	6	5	8	3	12	14	6	3
	超高齢期	24	9	11	4	14	4	6	7	5	11	13	3	8	12	6	6	3	8	13	1	16	7
	df=4		$\chi^2=4.45$			$\chi^2=4.83$			$\chi^2=4.45$			$\chi^2=3.20$			$\chi^2=2.54$			$\chi^2=6.80$			$\chi^2=23.9***$		
性別	女性	50	22	19	9	33	6	8	18	12	19	32	7	11	26	14	10	13	14	23	18	21	11
	男性	19	10	4	5	13		5	9	3	4	8	1	10	13	3	3	5	5	9	11	4	3
	df=2		$\chi^2=1.88$			$\chi^2=3.06$			$\chi^2=1.92$			$\chi^2=6.29**$			$\chi^2=1.62$			$\chi^2=0.02$			$\chi^2=3.55$		
計		69	32	23	14	46	6	13	27	15	23	40	8	21	39	17	13	18	19	32	29	25	14

#1：分類にあてはまらない回答を一部除外

*** $p<.001$, * $p<.05$

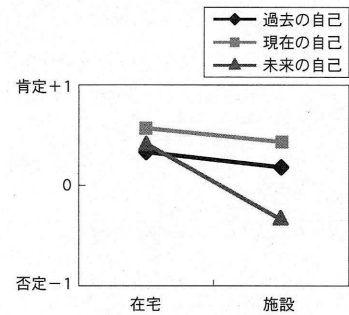


図3-3 居住環境の影響 1

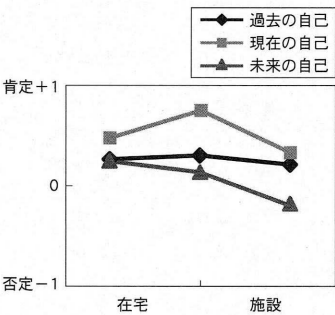


図3-5 加齢の影響 1

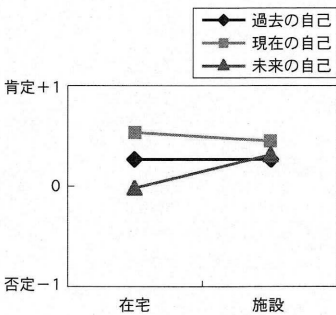


図3-7 性差の影響 1

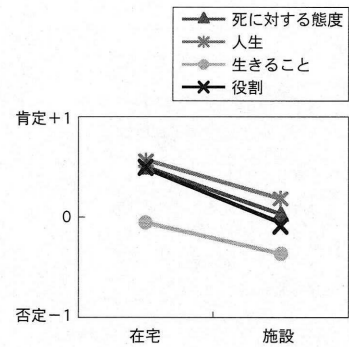


図3-4 居住環境の影響 2

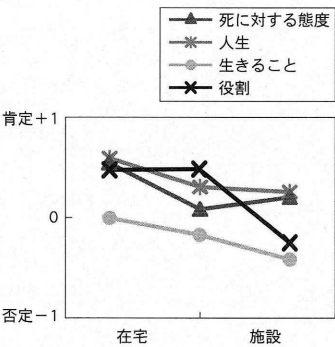


図3-6 加齢の影響 2

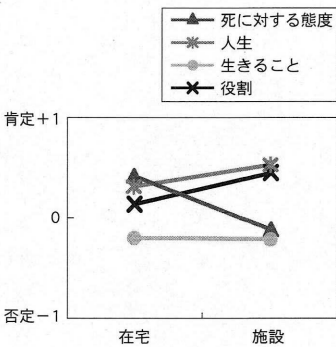


図3-8 性差の影響 2

その他、両群間で違いが見られた点を挙げると、②死に対する態度で、『積極的受容型』は両群同数（各10名）であるのに対し、『受動的受容型』は在宅群で15名、施設群で5名と異なっていた。③人生に対する態度では、在宅群

で、人生を『受容・感謝』している（11名）、現在『幸福』である（10名）等、肯定が多かったが、施設群では肯定のほかに『普通』（7名）といった中立的な回答が比較的に目立っていた。①過去の自己では、『何もない』が在宅群で1

名、施設群で9名と特に異なっていた。

(2) 加齢の影響

⑤役割で群間に有意差がみられ、前期・後期群で肯定が60%以上であったのに対し、超高齢群では『過去の事実』を客観的に回答した人が多かった。他の項目では大きな違いが見られなかった。

次に居住環境ごとに加齢の影響を調べた。在宅・施設群間で傾向に違いの見られた点を以下に記す。

①過去・現在・未来の自己では、在宅群は過去・現在の自己は加齢に拠らず肯定的で、未来の自己は加齢により肯定が若干減少する傾向であった。施設群は3項目とも高齢前期の肯定が少ないことが特徴的であった。

②死に対する態度では、在宅群は超高齢期で否定が多かった(4名中2名)のに対し、施設群は加齢とともに否定から肯定へ変化し、在宅群とむしろ逆の傾向を示した。

⑤役割では、在宅群は高齢前期・後期で多くの人が役割を自覚しているものの、超高齢群で役割があると答えた人はいなかった。施設群は、加齢に拠らず客観・中立的に過去の役割について述べる傾向を示した。

(3) 性差の影響

性差で有意だった項目は、②死に対する態度、⑥信仰であった。残差分析の結果、②死では、『否定』で男性(52%)が女性(22%)より有意に多く、⑥信仰では、『先祖』を大切にすることが女性で有意に多かった。

(4) 考察

(i) 居住環境の影響

居住環境による精神的特徴の影響は大きいと考えられた。

在宅高齢者は、現在と過去の自己で満足感を示し、未来の自己で意欲的であった。一方、施設高齢者は、現在の自己で在宅者と同様に幸福感や満足感を示し、概ね肯定的であった一方、

未来の自己で、死や未来がないことを回答した人が多く、在宅・施設間で顕著な違いがみられた。下仲(1988)によると、在宅高齢者は、過去の自己把握は基本的に肯定的であり、自己の未来の終極に死や老化を設定して、限りある未来を積極的に生きようとする意欲が強くみられ、施設高齢者は、過去の自己で客観的、未来の自己で肯定的姿勢が少なかったと述べられ、本研究の結果と同様の傾向となっている。

役割では、在宅高齢者は、現在の役割を自覚している人が多い一方で、施設高齢者は、自分の役割はこうであったと過去を振り返る傾向にあった。回答内容を詳しくみると、在宅高齢者は、年齢に関わらず仕事や主婦業等の明確な役割を持つ人と持たない人との個人差が大きいですが、明確でなくても、家族を見守る、邪魔をしない等のいわば間接的役割を答えた人が多かった。一方、施設高齢者は、間接的役割を答えた人も少なく(3名)、一様に過去の役割について答えていた。この結果から、入居によって家族や社会から離脱する自覚が、施設高齢者に存在するのではないかと考えることもできる。

(ii) 加齢の影響

精神的特徴に与える加齢の影響は、高齢者全体としては顕著でなかった。下仲(1988)の言う、加齢の影響は自己概念の次元で一様でないという結果を支持するものである。

一方、本研究では、在宅群・施設群間で加齢の影響に違いがみられた。在宅高齢者では、加齢に伴い過去・現在の自己を除く各項目で、肯定から否定へ、特に、後期から超高齢期における変化がみられた。施設高齢者では、過去・現在・未来の自己に関して高齢前期群が最も否定的な反応を示した。つまり、居住環境間の精神的特徴の差は前述したように全体では顕著な差であるが、年齢層が高くなるにつれ、その差が少なくなる傾向にある。このような居住環境と加齢の交互作用ともいえる傾向は、下仲の結果

にはみられない点である。ただし本研究では、在宅高齢者の超高齢群、施設高齢者の高齢前期群の人数が相対的に少ないため、更なる調査が必要である。

また超高齢群で、過去の自己を『何もない』と回答し、未来の自己に『死』を言及し、時々『死』を思い、人生に『意欲』的でなく自然に身を任して生きている、といった傾向が、高齢前期・後期群と比較して顕著であった。このような「生への興味の収縮」や、超高齢群で在宅・施設間の差があまりみられなかったことは、超高齢者像の表れであるといえないだろうか。

(iii) 性差の影響

有意な性差の影響は、死の態度の否定が男性で、先祖を信仰する人が女性で多いことである。また他のSCTの反応内容から、男性の特徴として、未来に意欲的であり、家族を見守る役割を自覚し、世の中のことを時々考えるという傾向が示された。このことから、男性は、定年退職後も何らかの役割が意識化されていると言える。これは、それまでの人生の役割から派生した使命感や責任感等が、老後も意識され続けているのかもしれない。また、今回の対象者では、男性の年齢層が比較的若かったことも無関係ではないと考えられる。一方で、死の態度で拒否的な反応を示す男性が多かったが、配偶

者との死別や施設入居等のライフイベントで、このような役割を失い、危機的ともいえる精神状態に陥った、とも考えられる。このことは後の事例にて詳細に検討していく。また、女性は、未来の自己で、「家族や友人とうまくやっていく」等の協調性の志向や、「このままの状態」といった継続的志向がみられた点で男性と異なっていた。

3-2. PGCモラル尺度の測定結果と考察

(1) 因子分析

Lawton (1975) は、「心理的動揺」「孤独感・不満足感」「老いに対する態度」の3つの因子を抽出している。本研究で因子分析を行ったところ、その因子項目が合致せず、特に第3因子の「孤独感」が大きく異なった。一方、星野 (2001) に従い因子数2として再抽出したところ、十分な一致を示した。よって因子数として2を選び、因子負荷量 = .30以上からその下位項目を構成した。さらに、Lawton (1975), Liang, Asano, et al (1987) のモデルを参考にして項目内容を決定し、第一因子を「心理的動揺」、第二因子を「老いを受け入れる積極的な態度」とした。結果を表3-9に示す。

(2) 居住環境、加齢、性別についての分析結果

2つの下位尺度についてそれぞれ、居住環

表3-9 因子分析結果と下位尺度の決定

下位尺度 (質問項目)	因子分析結果		因子得点		
	因子寄与	累積寄与率 (%)	平均	分散	Cronbachのα係数
「心理的動揺」 (4,7,12,16,17：計5項目)	2.69	19.91	3.70	1.92	0.631
「老いを受け入れる積極的な態度」 (1,2,6,8,9,10：計6項目)	1.38	32.25	3.52	2.84	0.650

表3-10 各要因（居住環境、加齢、性差）に関するPGC下位尺度得点の分散分析

	要因	居住環境	年齢層	性別	居住環境×年齢層	居住環境×性別	年齢層×性別
心理的動揺	F 値	0.00	1.41	0.06	1.44	1.72	0.72
老いに対する積極的な態度		19.19***	1.26	0.03	2.30	0.01	0.00

*** $p < .001$

境、加齢、性別を要因とした分散分析を行った。結果を表3-10に示す。

(3) 考察

「心理的動揺」では、平均して得点が高く、加齢や居住環境に関わらず安定していた。下仲ら(1981)の研究では、加齢とともに増加する身体的不安が施設入居によって安定化するとされた。本研究では、施設高齢者の平均年齢が在宅高齢者に比べ高かったため、「心理的動揺」は結果的にで変化を示さなかったとも考えられる。

「老いを受け入れる積極的な態度」では、主効果は居住環境で得られ、施設群は有意に低得点であった。下仲ら(1981)は、施設者が入所後の集団生活に適應するためには、自己主張するよりもお世話になりますといった依存的受け身的な姿勢が有効であろうと考察したが、施設者のこのような依存的傾向が前記主効果に表れていると考えられる。ただし、施設入所する人は、そもそも老いを受け入れる積極的な態度を示さず依存的傾向が強いとも考えられ、結論にはさらなる検討を必要とするだろう。

また、交互作用は得られなかったが、施設者の高齢前期において顕著に低得点であった(4名の平均が1.25点)。これは、比較的若い年齢で施設入居したことにより、未来への展望が持てなくなり、ある種の絶望感やあきらめといったものを生じていることに関係していると考えられないだろうか。

3-3. 高齢者の精神的特徴のまとめ

SCTの結果、在宅高齢者は、各項目とも肯定的であったが、施設高齢者は、未来の自己に否定的で、現在の役割を持たない点が顕著であった。また、施設高齢者の高齢前期では、現在に否定的な危機型が多く見受けられたこと、超高齢期では、在宅高齢者と施設高齢者の差がみられなかったこと、が特徴として挙げられた。

PGCモラル尺度の結果、高齢者は概ね心理的に安定していることが示されたが、老いに対する積極性の点で、在宅・施設間で異なる傾向を示した。

以上の結果から、高齢者の精神的特徴として、主に3つの型が探索的に考えられる。1つは在宅高齢者に多い「意欲・継続型」であり、自己の追求に意欲的で、役割を自覚し、老いを積極的に受容している型である。2つめは、施設高齢者の高齢前期(75歳未満)に多く見受けられた「危機型」であり、自己に対して否定的で生きる意欲が低く、老いを受け入れていない型である。3つめは、施設高齢者に多い「人生幸福型」であり、未来に意欲を持たず役割のないことを自覚しているが現在の自分や人生には幸福感がある型である。この型においては老いを受け入れる態度は一様でない。また在宅高齢者の超高齢期もこの型と同様の傾向を示したことから、超高齢期に多い型であるともいえる。

IV. 総合的考察

4-1. 「意欲・継続型」

本結果から明らかになった「意欲・継続型」では、役割を自覚し、未来を肯定的に捉えたことが特徴である。人は、個人差があっても、生産的な仕事や実際的な親役割からいずれ離れていく。Henry(1965)は、老年期が青年期や成人期と異なる点は、時間における概念だと述べている。老年期とは、「関与からの解放」であり、様々なことに従事しなければならなかったこれまでの感覚とは異なるとしている。つまり、老年期では、自らが何かを選択し、社会的相互的に関与していく視点が、これまでと変化すると述べている。それ故に、自己決定するという「自立」が重要な概念となってくるであろう。

役割について全体的にみると、加齢と共に実際的な仕事から退き、周囲の人とこれまで通り

に仲良くやっていく、家族をそっと見守っていくことが自分の役割として自覚されていた。Cumming & Henry (1961) は、このような役割を柔軟に変化させていくことが重要であると唱えた。役割が変化しても、何らかの「役割がある」と自覚した人は、役割のない人と比べ、未来を意欲的に捉える、あるいは、このまま継続すると考えており、今まで生きてきた人生を肯定視し、現在の自己に満足し、さらに老いを積極的に受け入れることと関連していた。これは、人生の満足度と活動（社会的相互作用）が大きく関わっているという活動理論を支持した結果であった。

では、高齢者にとって未来とは、どのような意味があるのだろうか。Erikson, E. H. ら (1986) によると、そもそも未来とは、これからやってくると思われる人生の季節に対するある種の心理的な準備を意味するものであり、数十年は続くだろうと思われるその人個人の期待なのだが、老年期にとっては、無限の未来ではなく、はるかに不確実なものであると述べた。しかしながら、Erikson, E. H. ら (1986) のパークレー調査 (1981) の結果では、「それでも実際は、相変わらず自分たちの未来を人生そのものの一部と考え今までの生活がそのまま継続するという見地から話をする (p67)」と述べている。本調査の結果も、「お友達と旅行に行きたい。楽しみです」等の回答がみられ、「未来を活動の時間 (p68)」として捉えている人や、「このまま続くでしょう」と時間というものを「いつまでも価値ある資源 (p68)」として捉え、さらに、「自分のやり残したことを十分にやっていく」といった「自分のための道標を未来に設定する (p68)」人が見受けられた。

「死」という未来をどのように捉えているかは後述する。

4-2. 「危機型」「人生幸福型」

一方、本調査では「役割のない人」も多く、半数以上であった。これは、様々な社会的関与から解放され、自由になった時間を自らの意志で選べない人と考えられる。例えば、身体的衰えにより介護が必要な人、「息子が勧めたから」、「周囲に迷惑をかけたくないから」と施設入居した人である。これらの人にとって、「関与からの解放」(Henry, 1965) が何を意味するのだろうか。

役割がないと回答した人で、未来を肯定的に捉えている人はほとんどいなかった。彼らにとって未来とは、「死ぬだけでしょ」「もう何もありません。今更未来なんてありますか」等と、「意欲・継続型」と異なり、もはや無限の未来ではなく、死という確信がさらに身近に強まっているようである。

人数は少なかったものの、特徴的だった「危機型」は、上記に加え、「老いに対する積極的な態度」が低得点だったことから、老年期の課題に対する抵抗あるいは嫌悪感を示し、現状を受け入れられず、その結果、自己に対しても否定的で生きる価値を見失っている状態である。本調査でも、配偶者の死別や、病気で生きる意欲を失っている人が見受けられた。特に男性にとって、配偶者と死別することは大きなライフイベントであり危機を招く可能性がある。(河合ら, 1990, 前田ら, 1988) 期待すべき未来が、ほとんど終わりに近づいたとして否定的に捉え、死別や病気等危機的なライフイベントをきっかけに過去を振り返り、人生を「自分の人生は無駄であった」「後悔している」と評価した場合、危機的というよりむしろ絶望に近い (Butler, 1963)。

一方「人生幸福型」では、役割がなく、限りある未来を感じているものの、現在の自己や人生には幸福感がある、もしくは客観的に述べたことが特徴である。いずれかのSCTで家族へ

の思いを語っているのが特徴であるが、これは、社会から離脱し、相互的関与がほとんどないものの、家族への心理的な関わりがあることを示唆している。事例でさらに検討する。

また、今の私は「幸せです」、これまでは「何も心配していなかった。これまではこれまで」「よかった」と言い切った人が多くみられた。Erikson, E. H. ら (1986) はバークレー調査 (1981) で、「わたしの知る限り後悔はありません」等という回答を得たが、これが必ずしも生涯を通じての満足を示しているわけではないことに注意しなければならないとし、恐らくこのような人は、「擬似統合」の過程であると解釈している。疑似統合とは、「受け入れ難いと思われる要素を否定することによって、全体としては満足のいくのライフスタイルであったという見方を構築する過程である (Erikson, E. H. et al, 1986, p74-75)」。さらに、過去に選択した決定や行動の進路を今は変更することはできないのだという考えを受け入れようと苦心する一方で、今更考えても仕方がないのだからという一種の諦念が窺えると解釈している。

本研究ではそれが擬似統合であるかわかりかねるが、受け入れ難いと思う要素を否定するよりも、むしろあきらめの念が強いのかかもしれない。この型には施設者が多いという本結果から考えると、これが限られた環境で自分なりにうまく適応させている手段だと考えることができないだろうか。下仲 (1981) は、我が国の施設高齢者が自己を明確化せず、回避的であってもそれは逆に適応する手段として捉えた。本結果でも、「積極型」のように過去や現在の自己を明確化せず、「言い切り方」が見受けられたが、適応面から考えると肯定的に捉えることができるだろう。さらに、この諦念は、日本の文化を考慮にいれると、自分個人の満足感や達成感に浸るというより、むしろ家族等の周囲の気持ちを感じながら、また周囲の環境に適度に依

存しながら、あきらめに通じていくものかもしれない。山口 (2000) も、高齢者を人生の語りから分類した結果、我が国では未解決の葛藤を解決し、肯定的な意味を見出していくといった意欲的な高齢者が全てではないことを示唆している。

このことは、仏教と関連して考えてみると興味深い。奈倉 (1999) は、仏教の根本思潮である「三法印」の教えを「常に変化するのものがごとの自然な姿であり、失われることを嘆いたり、過去に執着することが苦を生み出す。そしてともすれば自己中心的な考えに陥りやすいのが人間であるが、ものごとは自分の思い通りに運ぶものではなく、様々な人や自然や社会の動きの中で展開していくものだということを心にとどめるべきだ」と述べている。本結果で、仏教を積極的に信仰している人は32%と多くはなかったが、我が国で仏教が宗教という独自の世界観を確立しているというより日常に浸透していると考え、「言い切る」ことも高齢者の知恵なのかもしれない。

しかしながら、実際、今までの生活に全く執着を示さないということは当然難しい。「人生幸福型」の事例からもわかる様に、「十分に生きましたから」といった気持ちを抱きながらも、人や社会との関わりがある限り、どこかで「生」に思いを馳せるのかもしれない。

いずれにしても、様々ななかかわり合いを縮小した結果、家族を含めた「関わり」に未練をあまり感じない、あるいは未練があったとしても自分なりにこころの中に納めている人が「人生幸福型」であると言えるかもしれない。

4-3. 死に対する態度

これらの3型の共通の課題として、必ず訪れる「死」がある。本結果では、約60%の人が死を「当然来るもの」として捉えていた。

Erikson, E. H. ら (1986) は、生活があまり活

発でなくなり、いつ死んでもいい、死にたいと口に出したとしても、実際は、人生への感覚的愛着を味わっているようで、人生を価値あるものにするのは、子供や孫への思いであると述べた。本結果からも、「十分に生きましたから、いつ死んでもいいです」等と答えている一方で、「孫のことが心配です」「息子が会いに来てくれます」等と家族への思いを語った人が少なからず見受けられた。

また、「自然に任せます。」と回答した人も多かったが、加藤ら(1977)によると、一般に日本人の死に対する態度は、あきらめをもって受け入れられている。その背景は、死と日常生活上との断絶、すなわち、死の残酷で劇的な非日常性を、強調しなかった文化であると述べている。これは『受動的受容型』が『積極的受容型』と同数(各20名)で多かった結果からも頷ける。

さらに、河合(1991)によると、死は「自然」の現象であり、西洋の近代の自然が人間にとって客体的対象として考えられる一方で、「本来的にそうであるもの」という。つまり、日本人の生死の隔壁が薄い死生観によって生きていると述べている。本結果でも、「まあ自然にまかせます。深くは考えません」と死をなんとなく漠然と境界をあいまいにさせている人が見受けられた。

本調査のSCT項目で、性差に有意差がみられたのは、「死に対する態度」と「宗教」であったが、その回答を各個人でみてみると、女性は「お父ちゃんのところへ行きます。」「あの世に言うてからお父さんとお話することがたくさんあります」「家族のもとへ行くのを楽しみにしています」と何となく死後も生命が永続するだろうという期待に支えられて生きている人が見受けられ、死をつきつめて特定の宗教に頼るのではなく「あの世」への親和性を示唆する態度が多かった。一方で、「このような状態ではもう

死にたい」といった男性は、配偶者と死別しており、現実からの不満足感から死を否定的にみていた。宗教のSCT項目において、「先祖を大切にする」に分類された男性が僅かひとりであったことも死への態度と関連しているのかもしれない。

V 「3 類型の個別的検討」

これら3 類型の中から代表例を取り上げ、事例検討を行う。

5-1. 事例－1 (意欲・継続型)

Aさん 男性・72歳・在宅(面接時間:70分)

1. 生活史:15歳までの10年間続いた戦争で自分の価値観が揺らぐが、大学を卒業し就職。やればやるほど成果はあがり、その後、社長を長期に渡り務め70歳で引退。現在は、妻と海外旅行に出かけたり、勉学に励む。
2. 臨床像:「伝えたいことがたくさんある」と意気揚々と話す姿、堂々たる態度が印象的。歴史上の人物の名言等も引用し、知的に高い面も窺えた。
3. PGCモラル尺度結果
「心理的動揺」 3点
「老いを積極的に受け入れる態度」 6点
4. SCTの結果 表5-1
5. 考察

Aさんは前期高齢期の在宅者である。「関与からの解放」(Henry, 1965)という劇的な変化ではないものの、仕事という社会的役割を自分なりの方法で収縮している。故に「口を挟まないこと」が役割になると同時に、限りある時間に気づきやり残していることに活力を注いでいる。大学の聴講生や旅行は、役割の「代替」(Friedmann & Havighurst, 1954)といえるであろう。

表5-1 意欲・継続型（Aさん）のSCT

これまで	「戦争で大変な時期もあった。食物も何もなかったなあ。でも、就職して、世の中は右上がり、どんどん伸びていったな。そんな時期にサラリーマンとしては最も幸せな時期を過ごしたと思います。幸せです。」
今の私は	「現状に非常に満足や。仕事を70までやとったが、平均寿命から考えると、後10年しか残っていないことに、はたと気づいたんや。一度失ったら手に入らないものは、時間やし、これからは、自分のやりたいことをやって、力を最大限に伸ばしていきたい。まあ、思った道を進んでいきたいね。今は、大学の聴講生をやったり、妻と海外へ行ったり、やり残したことをやっていますわ。」
これから	「日本は、徹底的に悪くなるか、再び繁栄していくのか、両極端に別れるでしょう。何となく幸せだということはもうありえませんわ。勉強をやる人とやらない人では大きな差がつくと思いますよ。」
死に対して、私は	「仕方のないことでしょ。自然の成りゆきだから。大事なのは、人間は皆死ぬけれど、やりたいことをやり尽くすという努力をすることです。まあ自分では覚悟できているつもりでも、いざとなったらわからんな。できればころっと死にたい、なんて思っているということは、やっぱり恐怖心はあるのかも。でも今死んだとしても、納得して死ねる気がします。未練がありませんとこまでできているから。」
生きるということは	「一生勉強だと思います。年をとっても進歩していくもの。記憶力は衰えていくけども、神話など、感性の面で習得していくことができる。これからも続けてゆく。これは自己満足やな。いろいろ経験したことを友達と語り合いたい。」
私の役割は	「あまりない。強いて言うと、仕事で口をはさまないこと。聞かれれば意見を言いますが、差し出がましいことはあまり言わないようにしておる。それと、自分の役割として生きている間は、妻と徹底的に仲良くやってゆくことか。」
今の願いは	「やりたいことをやるためにはとにかく健康です。」

PGCの高得点の条件は、Lawton（1972）によると「自分自身への基本的な満足感」と「環境のなかに自分の居場所がある」だが、今の自分を「非常に満足している」と語ることや配偶者や友人との関係性からもわかる。

鑑ら（1997）によれば、「自我の統合」とは、「過去の経験をプラスもマイナスもすべて受け入れ、そこから人生の最後のとりくみないし、生き方の姿勢を獲得していくことを意味している。これは、自然な現象であるというより、意志的に努力して得られる心的プロセスである（p29.）」。Aさんは、戦争や仕事等のこれまでの経験を受け入れ、退職を機に、残りの人生に意欲的である。また、記憶力は衰えても、感性等の面では、「進歩する」と考えていることから、これまでの価値観とは異なる側面を感じ始めているのだろう。これがAさんにとって、人生の最終段階へ向かうとりくみなのかもしれない。

また未来では、日本の現状と未来への不安を熱心に語ったが、70歳まで作りあげてきた、言わば経済的価値観から、宗教感などを含め徐々に広がりつつある視野が今後どのように変容し

てゆくのだろうか。役割を収縮できても、長年積み上げてきた個人の価値観から、退職後さらに創造してゆくこと（Peck, 1968）は、容易ではないことが窺える。

また、今の願いから、健康に不安を感じ始めている様子が伺える。Havighurst（1961）は、身体の衰退などの喪失感による適応と、同世代の仲間でこれらの喪失感を分かち合えるような人間関係を指摘し、Lawton（1975）は、モラルを高く保つことのために動かしえないような事実についてはそれを受容することが必要としたが、Aさんが、「友人関係」を保ちつつ、今後喪失にどのように適応していくのかはさらに別の課題である。

5-2. 事例－2（危機型）

Bさん 男性・71歳・施設（面接時間：20分）

1. 生活史：Bさんは、新制高等学校を卒業後、就職。転勤が多かった。55歳のときに脳血栓で倒れてから右片麻痺となり、長い入院生活を送る。3年ほど前から娘の住居に近い現施設へ移る。介護度は2である。
2. 臨床像：車椅子から筆者の顔をじっと見つ

める目が印象的。ベット横に生前の妻の写真が飾られており、筆と妻がよく似ていると言い、どれほど優しくかったかという記憶を辿り、涙された場面もあった。

3. PGCモラル尺度結果

- 「心理的動揺」 4点
- 「老いを積極的に受け入れる態度」 2点

4. SCTの結果 表5-2

5. 考察

Bさんは、「危機型」の最も多かった高齢前期の施設者に分類される。Bさんの場合、身体的な衰退というよりは、中年期の働き盛りのときに急に訪れた予期できぬ否定的なライフイベントであったと推察される。その事実が変わることなく現在、未来へと続くことで、16年経った「今」もこの病気を受容し難いものとして感じられているようだ。老年期は、役割や身体面の喪失をどのように適応するかが課題となることは既に述べたが、この身体的喪失が、予期できない時期に訪れ、一度に身体を自由を失い、それがさらに自分の役割を喪失する形になっている。Havighurst（1961）が喪失に伴う適応には、「代替」が重要であると主張したが、その「代替」がこのような場合、どのように選択できるのだろうか。

また、最も親密な人間関係、妻との関係も「死

別」という形で喪失した。身体面での喪失が、役割という喪失を重ね、数年後には人間関係をも喪失した結果、「代替」などを可能にする状態ではなくなり、現在の絶望に近い危機的な状態へと繋がっている。

しかしながら、人間関係の喪失とは、厳密には日常生活での人間関係の喪失と述べた方がよいかもしれない。配偶者との死別に適応できていないと言い切ればそれまでなのだが、写真を見つめながら筆者に妻の姿を投影したことからも、Bさんにとって妻を思う気持ちが恐らく今でも様々な感情をもって存在しており、相手からの実際的な返答がなかりうとも妻との関わりは続いているだろうと推察されるからである。人生において「まあまあいい方ではないかと」と語られたことは、生きてきた全てを否定的に捉えるのではなく、過去を受容する姿が垣間みられた。これは、16年という長い間に培ったBさんなりの適応から得たものであるかもしれない。Lawton（1975）によれば、高齢者の適応感とは、不良な方向に変化しつつあるという自己認知が欠如していることである。また、長期の身体不自由な状態を客観的に捉えるのではなく、自分が日々このような状態であることに適応している面は、一種のあきらめといえるかもしれない。

表5-2 危機型（Bさん）のSCT

これまで	「サラリーマンで転勤も多くて。元気なときはいいこともあった。いろいろ後悔している。」
今の私は	「分かりません。幸せでない。」
これから	「何も分からん。」
死に対して、私は	「死んでしまいたい。早く家内のところに行きたい。すぐにでも早く死にたい。そのうちではダメだ。」
私の人生は	「なんて言うのか、まあまあ、いい方ではないかと思う。」
生きるということは	「元気なときはいいなと思ったが、病気でばや一つ思っていると死んだほうがいいと思う。」
私の役割は	「考えたことない。」
今の願いは	「死んでしまいたい。」
時々、私は	「元気なときはいろいろ考えたが、15、6年もこんなだったら何も分からない。死ぬることとかも考えていない。」

このように「危機型」とは、身体、役割、人間関係など様々な喪失が重なり合う中で、異なる視点や価値観が生み出せなくなった場合に陥るということがわかったが、時期や状況、これまで生きてきた過程によっては、そのような価値観が生み出すことが容易でないことも事実である。しかしながら、時間とともに、あきらめかもしれないが、その耐えがたい喪失した状態に適応している面も評価すべきであろう。

5-3. 事例－3（現在幸福型）

Cさん・女性・82歳 施設者（面接時間：15分）

1. 生活史：小学校を卒業。夫が酒飲みだったので、若い頃は家を守り、子供3人を育てることに必死だった。43歳の時息子と、73歳の時夫と死別。子供（息子）に迷惑をかけたくないからと4ヶ月前施設へ入所。それまでは息子夫婦と孫と暮らしていた。特に現病歴はない。
2. 臨床像：背中が丸く、杖をついてゆっくり歩く。「役になんか立ちますかいな」と笑顔を見せながら語った。よくケラケラと笑

い、表情もあっけらかんとしていたが、自分のことを「気がつきすぎるからしんどい」と異なる一面も覗かせた。

3. PGCモラル尺度結果

「心理的動揺」 4点

「老いを積極的に受け入れる態度」 4点

4. SCTの結果 表5-3

5. 考察

Cさんは、「人生幸福・客観型」に最も多かった施設者に分類される。あまり多くを語られなかった。精神的機能を考慮すると、下仲（1978）の述べた通り、興味関心の範囲が薄れ精神内界の収縮化が起こっているのかもしれないが、一方で自分の中に「もろもろ」を収めた結果である印象も受けた。これは、今更といったあきらめからくるものも含んでいるかもしれない。短い会話に収まったCさんの人生は逆に多くのものを含んでいる印象を受ける。今も幸せと語りながらも、最後に質問以外に付け加えた言葉からも考察できるように、息子を思う気持ちが切実に感じられ、また思う故に自分の気持ちを言い切れない切なさ伝わってきた。最後に言わ

表5-3 現在幸福型（Cさん）のSCT

これまで	「おじいさんもやさしかったし何もなく幸せな方です。」
今の私は	「今だって幸せですよ。のん気に暮らせてもらっているから感謝しています。何も思うことはない。いつまでも長生きしても迷惑かけるのが嫌やと思っているだけ。でも寿命があるうちは、無駄死にもできないし。」
これから	「そんなもんありますかいな。人生もうないのに。子供が元気に事故にだけは遭わないように陰から拝むくらい。ここまで生きたらもう満足ですわ。」
死に対して、私は	「恐いことは何もない。もういつ逝っても結構です。子供の写真見ながら、何も思い残すことはないから、いつでも迎えに来ていいよって言っています。これがこころの慰めですわ。情けない人生でしょ。」
私の人生は	「普通。結構だったと思っています。」
生きるということは	「難しい。」
私の役割は	「終りですけどに何もありません。お爺さんが呑気やったから家を守ってきた。」
今の願いは	「82も3も生きたら何も思い残すことはない。」
時々、私は	「あんまり長わすらいせんとお迎えが欲しいと思っています。」

その他、筆者との面接が終わる別れ際に、自発的に「ここにいるのは、息子が“お母ちゃん、養老院行くの嫌か？”って聞くから“嫌なことないよ。あんたが探してくれたらどこにでも行くから”って言いました。嫁と私の間で気を使うのがかわいそうやし。やっぱり自分も気を使うのは嫌やから、どこか長く居させてくれるところ探してもらおうかって気にもなった。でも自分の家にも戻りたいと思うこともあるけど、まあここに居させてもらうのが幸せなんや。何も考え無い様で考えたりもしますねん。」と語られた。

れた「何も考え無い様で考えたりもしますねん」という言葉がまさにこのような状況を語ってくれている。

Erikson, E. H.によると、「英知」とは、「死そのものに向き合う中で、生そのものに対する聡明かつ超然とした関心」(1982, 村瀬ら訳1989, p79)である。山口(1994)によると「英知」とは、人生において獲得し、守り育ててきたいっさいに距離をとり「相対化」し、死に向き合う中で過去への執着、さらには、自己そのものへの執着を超克する力である。さらに、この相対化・断念の力であると同時に、身近な人々や周囲に対する、生き生きとした「関心」ないしは「愛」でもある。これらの執着を断ち切ることは、並大抵のことではない。

Cさんの人生に対する言葉は、「普通」と答えたことからわかるように、距離をもって客観視された。また、これまで生きてこられたことに満足感を示し、思い残すことはなく、もういつ逝っても結構ですと語り、死に向き合い、過去への執着心はほとんどない。しかしながら、どこか寂しそうな印象を受けたのは、今回限りの面接では分かりかねるが、自分が居た場所へ戻りたいという自分の「生」に対する気持ちから生まれた感情と、息子への気持ちが絡み合い、本当の気持ちを言い切れない思いがあるからかもしれない。これが、Erikson, E. H.が述べる「英知」のような執着のない生への関心であるかは、議論の余地を残すだろうが、Cさんは、自分に対する執着心よりも息子への愛を感じていたといえるのではないだろうか。さらに、この気持ちは、長生きした満足感と、息子より長生きした罪悪感が入り混じり、死別した息子に迎えに来てもらうと思う中で死への親和性を感じている、非常に微妙な気持ちが窺われた。

Erikson, E. H.ら(1986, p352)によると、アメリカ社会で高齢者にとって大切なのは「活力(vitality)」であり、それが生命力の呼吸で

ある。そのためには、「生き生きと(vital)」かわりあい、「相互的経験を含まなければならない」と述べているが、Cさんの事例を通して考えられることは、相互的経験でなくとも、相手を思う気持ちがあるときにそれは「生き生きしたかわりあい」と言えるのではないだろうか。

さらに、Cさんにとって大切なのは、「寿命」であった。与えられた自分の寿命は、無駄にすべきではないとCさんは感じている。終末期の高齢者のケアに携わる奈倉(1999)は以下のように述べている。「人間は自分が生まれようとして生まれたのではない。また、死のうとして死んでいくのではない。いのちの働きで自分は生きており、心臓は自分が動けと命じなくても動き、たとえ止まれと命じても止まるものではない。この自分の意識を超えて働くいのちにまかせ、生命あるかぎり人間として生きぬくことが人間の務めではないだろうか」Cさんの場合も、いろんな思いを抱えていながらも、寿命とは自分の意志でどうにかなるものではなく、生かされているものという認識が根底にはあるように思える。

Cさんの事例を通して、「人生幸福型」とは、これまでの人生を自分のところに収めており、そこから連続して生まれた思いが、「今」と未来の「死」を評価していることがわかった。それは例えば、家族への思いであり、その思いは肯定、否定に関わらず「生き生きとしたもの」であろう。

VI. まとめ

様々な社会的関与から離れていく時はやがてやってくる。その時間をどのように捉えるかは個人の選択である。社会的役割以外でも、何らかの役割があると自覚していると、満足感や意欲感も高い傾向にあることが本研究より明らかになった。また、社会的役割から離脱していく

過程の中で、社会や人に対して個々に合った関わりを自らの意志で行っていく、つまり自己決定を行うという自立の概念が重要であると示唆された。

一方で、そのような時間を自らの意志で選べない人、選ばない人も見受けられた。家庭や社会の役割が減少し、身体的な衰退や居住環境等により、若い時のように活動し、関わるのが困難な状況にある。そのため「関わり」を手放してゆく必要がある。つまり、喪失に適應していかなければならない。

このような状況を受け入れることができない人は、適應感や満足感も低かった。さらに、これまで生きてきた人生すら否定する傾向にあり、未来も否定的に捉えているため、絶望に近い危機を抱えていると言えるだろう。

また、わりと自然に関わりを縮小していく人も見受けられた。このような人は、自己に固執し、過去の達成感や満足感に浸るというよりも、周囲の気持ちを察しながら、自分なりに今の状態を受けとめ、適應しているようであった。これは、日本という文化の中で形成された自己の価値観と死を自然のものとして捉える死生感からくることではないかと考える。

〈付記〉本論文は、佛教大学大学院教育学研究科に提出した論文の一部を加筆修正したものです。論文作成にあたりご指導くださいました佛教大学大学院教育学研究科の大塚義孝先生、調査にご協力くださいました施設・病院・センター並びに対象者の方に深くお礼申し上げます。

【文献】

- Baltes, P. B. (1987) : Theoretical propositions of life-span developmental psychology, 23, 611 - 626.
東洋・柏木恵子・高橋恵子監訳 (1993) : 生涯発達心理学を構成する理論的諸観点, 生涯発達の心理学 1. 新曜社, 173 - 204.
- Butler, R. N. (1963) : The life review : An interpretation of reminiscence in the aged. *Psychiatry*, 26, 65 - 75.
- Cumming, E. & Henry, W. E. (1961) : *Growing Old The Process of Disengagement*. Basic Books.
- Erikson, E. H. (1982) : *The Life Cycle Completed : A Review*. W. W. Norton & Company, Inc.. 村瀬孝雄・近藤邦夫訳 (1989) : ライフサイクル, その完結. みすず書房, 79 - 86.
- Erikson, E. H., Erikson, J. M., & Kivnick, H. Q. (1986) : *Vital Involvement in old age*. W.W. Norton & Company, Inc.. 朝長正徳・朝長利枝子訳 (1990) : 老年期 一生生き生きしたかわりあい. みすず書房, 57 - 77, 319 - 366.
- 長谷川和夫・井上勝也・守屋国光 (1974) : 老人の痴呆検査スケールの一検討. *精神医学*, 16, 965 - 969.
- Havighurst, R. J. (1961) : *Successful aging*. *The Gerontologist*, 1, 8 - 13.
- Henry, W. E. (1965) : *Engagement and disengagement : Toward a theory of adult development*. In Lawton M.P. & Salthouse, T.A. (Ed.) *Essential Papers on the Psychology of Aging*, New York University Press, 56 - 67.
- 星野和美 (2001) : ライフサイクルにおける老年期の心理社会的発達と人格特性に関する研究. 風間書房, 121 - 124.
- 石原治・下仲順子・中里克治・河合千恵子・権藤恭之 (1999) : 5年間における改訂PGCモラルスケール得点の安定性. *老年社会科学*, 21 (3), 339 - 345.
- 加藤周一・Reich, M・Lifton, R. J. (1977) : 日本人の死生観. 上下, 矢島翠訳. 岩波書店, 186 - 251.
- 河合千恵子・下仲順子 (1990) : 老年期における家族. *社会老年学*, 31, 12 - 21.
- 河合隼雄 (1991) : 日本人の死生観. 多田富雄・河合隼雄編著, 生と死の様式 — 脳死時代を迎える日本人の死生観. 誠信書房, 253 - 260.
- 木下康仁 (1998) : 老いと文化. *老年社会科学*, 20 (1), 9 - 15.

- 北山忍・唐澤真弓 (1995) : 自己 —文化心理学的視座. 実験社会心理学研究, 35 (2), 133-163.
- 厚生省 (2000) : 平成12年版 厚生白書新しい高齢者像を求めて —21世紀の高齢化社会を迎えるにあたって—. 株式会社ぎょうせい.
- 古谷野亘・柴田博・芳賀博・須山靖男 (1989) : PGCモラル・スケールの構造 —最近の改定作業がもたらしたもの—. 社会老年学, 29, 64-74.
- 古谷野亘 (2002) : 現代日本の高齢者観. 老年精神医学雑誌, 13 (8), 877-882.
- Lawton, M. P. (1975) : The Philadelphia Geriatric Center Morale Scale : A revision. *Journal of Gerontology*, 30, 85-99.
- Liang, J., Asano, H., Bollen, K.A., Kahara, E. F., & Maeda, D. (1987) : Cross-cultural comparability of the Philadelphia Geriatric Center Morale Scale : An American-Japanese comparison. *Journal of Gerontology*, 42, 37-43.
- 前田大作・坂田周一・浅野仁・谷口和江・西下彰俊 (1988) : 高齢者のモラルの横断的研究. 社会老年学, 27, 3-13.
- 奈倉道隆 (1999) : 老いと宗教. 老年社会科学, 21 (3), 311-316.
- Neugarten, B. L. (1975) : The future of the young-old. *Gerontologist*, 15, 4-9.
- 岡本祐子 (1990) : 高齢者の死の受容と自我同一性に関する研究. 広島中央女子短期大学紀要, 27, 5-12.
- Peck, R. C. (1968) : Psychological developments in the second half of life. In Neugarten, B. L. (Ed.) *Middle Age and Aging*, University of Chicago Press, 88-92.
- 下仲順子・村瀬孝雄 (1975) : SCTによる老人の自己概念の研究. 教育心理学研究, 23 (2), 104-113.
- 下仲順子 (1978) : ロールシャッハテストよりみた老人の人格機能. 社会老年学, 7, 33-41.
- 下仲順子・中里克治・長谷川和夫 (1981) : 施設入居と老人の適応 (2). 社会老年学, 14, 49-64.
- 下仲順子 (1988) : 老人と人格. 川島書店, 83-114.
- 下仲順子 (1997) : 現代心理学シリーズ14—老年心理学—. 培風館, 1-19.
- 袖井孝子 (1975) : 社会老年学の理論と定年退職. 社会老年学, 1, 19-36.
- 杉山善郎・竹川忠男・清水信介・沢田幸展・谷敷京太 (1978) : 老人の適応感情の測定尺度 —PGC生活意欲尺度の日本版作成について—. 札幌医進紀, 19, 1-8.
- Wells, L. H. & Stryker, S. (1987) : Stability and changes in self over the life course. *Developmental Psychology*. 東洋・柏木恵子・高橋恵子監訳 (1993) : ライフコースにわたる自己の安定性と変化. 生涯発達の心理学 2. 新曜社, 71-112.
- 山口充 (1994) : 老いの叡知. 岡田渥美編, 老いと死 —人間形成論的考察—. 玉川大学出版部, 293-318.
- 山口智子 (2000) : 高齢者の人生の語りにおける類型化の試み. 心理臨床学研究, 18 (2), 151-161.